様式7（市教委報告用）

27三鷹大沢台小発第107号
平成28年2月17日

三鷹市教育委員会　様

校長　髙橋　奨
（公印省略）

平成27年度　おおさわ学園　三鷹市立大沢台小学校　　学園・学校評価報告書

このことについて、下記のとおり報告いたします。

記

学園評価　※学園内で統一記述

今年度明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること	来年度の重点課題を解決するための改善方策
「小・中一貫教育」①問題解決型学習では、算数・数学では大きな指導力改善につながったが、他教科についての改善につなげるため、来年度の取組こそが重要と考える。 ②交流活動について、学習意欲、自己有用感を高める視点で見直しをする。 ③特別支援教育の学園として交流を充実させる。 ④防災教育を学園として実施すると共に、地域とも連携を図る。 「コミュニティ・スクール」①サポート隊の活動に関わるメンバーを増やす。 ②コミュニティ・スクールの活動の「見える化」を進めると共に、「理解度」「参加度」を高める。	「小・中一貫教育」①学園研究で算数・数学の教員を指導員として、他教科の問題解決型研究授業を行う。 ②中学3年生は、4年生と「俳句作り」の交流活動を続行し、中学1，2年生は小学校1年～6年までの授業交流を行う。 ③特別支援教育の学園としての研修と交流の年間計画を作成する。 ④防災教育の学園としての年間計画を、CS委員会、地域の防災対策本部と作成し、実施する。 「コミュニティ・スクール」①サポート隊の活動に関しての広報活動をCS，学校が一体となって取り組む。 ②コミュニティ・スクールの活動の広報活動を続行し、「見える化」をさらに進める。

学校評価　※学校ごとに記述

今年度明らかになった課題　※「第2回学校関係者評価」を経て記述	来年度の改善方策　※「第2回学校関係者評価」を経て記述
1　児童の学力・健全育成について ・「おおさわ学園版　家庭学習の手引き」を基に、家庭学習の習慣化を図り、児童の学習意欲が高まってきているが、自主的学習態度はまだ十分に育っていない。 ・生活指導の五本柱を学園共通で一貫した指導を行うことができたが、まだ十分に定着していない。 ***2　小・中一貫教育校として*** ・本校から中学校への乗り入れ授業の成果がまだ十分に上がっているとは言えない。 ・学園研究を通して、問題解決型の授業を実施し、9年間を見通した算数・数学の習熟度別少人数指導に対する児童の満足度は高いが、学習内容の定着は十分ではない。特に、「読み取る力」に課題が見られる。 ***3　コミュニティ・スクールの運営において*** ・学習ボランティア活動が日常化・充実しているが、リピーターが多い。 ・学校だよりや校内掲示板等を通じて、CSの活動についての広報の充実を図ったが、保護者の理解はそれほど高くはなっていない。	***1　児童の学力・健全育成について*** ・家庭との連携をより密にし、家庭学習の質の向上を図るとともに、問題解決型の授業の実践を増やし、児童の自ら学ぶ意欲を高め、自主的学習態度の育成を図っていく。 ・学校・家庭・地域が一体となって、学園全体で共通理解を図りながら、挨拶・時間遵守・整理整頓・忘れ物・言葉遣いの定着に取り組んでいく。 ***2　小・中一貫教育校として*** ・事前・事後も含め、相互乗り入れのシステムの見直しを図り、より学習効果が上がるように改善していく。 ・学園研究を通して、授業の質の向上とともに、「東京ベーシック・ドリル」等の効果的な活用の検証を行いながら、児童の基礎的・基本的な学力の向上を図っていく。 ***3　コミュニティ・スクールの運営において*** ・学習ボランティア活動の意義の広報をさらに充実させ、新たな人財の発掘に努める。 ・今年度作成した「おおさわ学園コミュニティ・スクールガイド」を活用し、CSの活動について、学園・学校だよりはもちろんのこと、保護者会や地域も含めた様々な会合でも積極的にPRを行い、理解を高めていく。

取組項目	今年度の重点目標	成果	課題と改善方策
人間力・社会力の育成	①キャリア・アントレプレナーシップ教育の充実 ②教育支援教育との交流充実	①年間計画に沿って、キャリアアントレ教育への人財活用や教育資源を3回以上活用し、学習活動に対する児童の満足度も70％以上であった。 ②E組と小学校の交流は、ふれあいタイムを活用した。大沢台小のわかば学級と羽沢小の交流は、自然教室やそれに向けた小小交流で実践した。校内での交流は、普段の授業だけでなく学年行事等を通して交流を行った。その結果、年間2回以上の交流ができ、交流の意義を感じた児童は60％以上であった。	①キャリア・アントレプレナーシップ教育のさらなる充実を図るため、小・中9年間の系統性がある全体計画・年間指導計画を作成する。さらに大沢地域の人財・資源を開発し、それら活用した指導計画を工夫し、児童・生徒が満足感もてるような学習活動となるようにする。 ②児童の満足度は、学校によって60％から90％と差がある。前回より向上しているが、満足度の低い児童の理由を分析して、さらに交流の質を向上させる。また、通常学級と支援学級との交流が計画通りには実践できなかった。計画通りに実践するためには、年度初めには交流の計画を完成させておく必要がある。交流の実施が難しい場合は、支援教育の充実のための実現可能な具体的方策を検討する必要がある。
学園・学校運営	①児童・生徒の育成に関する課題（学力・体力・生活指導）についての小・中連携 ②防災教育の充実	①学園研究や学園分掌等を通して、それぞれの課題について共通理解を図ることができた。特に、生活指導上の課題について、3校で重点化して取り組んだことで、一貫した指導を行うことができた。 ①児童・生徒会代表者会議で、小・中連携して、いじめに関するスローガンを作成して、その成果を報告し合った。 ②3校の生活指導主任を中心に、「学校避難所運営マニュアル」に連動した合同の引き渡し訓練を、今年度初めて計画を立て、実施することができた。	①児童・生徒の育成上の課題に対して、今後も継続して共通理解を図るとともに、経年変化を捉えて適切な指導ができるようにしていく。 ①児童・生徒会代表者会議を年3回設定し、いじめ防止の取組を年間を通して学園全体で実施し、第3回目の会議にその成果を検証する。 ②七中の保護者にとっては初めての引き渡し訓練であったため戸惑いも多かったが、今後その意義の啓発を図り、防災意識をさらに高めていく。
小・中一貫教育校としての教育活動	①ふれあいタイムの充実 ②学園研究における学力向上の検証	①今年度、中学3年生と小学4年生のふれあいタイムを中学3年生が小学4年生があらかじめ作った俳句の指導をするというものにした。ふれあいタイムの内容は、中学3年生が小学4年生の心情を話し中からうまく引き出し、それについて、アドバイスするという具合で、活発なやり取りができ、俳句作りという楽しさをお互いに知る時間になった。 ②2年間の研究協力校としての「算数・数学」の問題解決型の授業の指導方法については、3校とも統一した形式のものができ、児童・生徒への指導方法の定着とともに、実践を進めることができた。	①中学1年生と小学3年生のふれあいタイムが、学習意欲につながるものを作れなかったので、来年度は、全学年とも、授業を通したふれあいタイムを企画していく。 ②問題解決型の授業を確立し、その実践も進んでいるが、習熟度別の教材開発がまだの単元があるので、その点を来年度は進めていく。

取組項目	学校の経営目標（中期目標）	今年度の重点目標（単年度目標）	今年度の重点目標を達成するための具体的方策	第1回評価 取組	第1回評価 成果	第2回評価 取組	第2回評価 成果	自己評価（第2回）	学校関係者評価（第2回）
人間力・社会力の育成	①キャリア・アントレプレナーシップ教育の充実	①発達段階に応じたキャリア・アントレプレナーシップ教育の充実を図る。	①キャリア・アントレプレナーシップ教育充実のための地域人財の活用を昨年度より増やす。	3	2	4	4	[成果]キャリアアントレ教育への人財活用3回以上の活用率が、1・2学期トータルで90%を越えた。それに伴い、児童の満足度も、2学期末現在で84.0%と大幅に上がっている。外部人財による「外部評価」も着実に実施できている。 [課題]6年生のキャリア・アントレの取組が3学期に計画されている。確実に実施し中学校へつながる成果を上げていくとともに、来年度は、特にアントレ教育に重点を置いて、計画を見直し・整理してさらに成果を上げていく。	・妥当・適切・良い(9)。 ・2年生の発表は素晴らしかった。先生方の指導の賜物。[課題]が改善点になっていない。改善点は？ ・来年度への課題を上げた方がいい。
	②特別支援教育との交流充実	わかば学級・E組と通常学級との交流を進め、相互理解をより深める。	②わかば学級と通常学級の交流を深めるとともに、学期に1回以上わかば学級とE組の交流を行う。	3	1	4	2	[成果]わかばとの交流は計画通り進み、86.7%が3回以上交流を実施することができた。また、2学期は、ふれあい活動を通してE組との交流も実施することができた。 [課題]運動会等、学校行事での交流も活発に行われ、交流に対する児童の満足度は64.7%で、前回より10ポイント以上上がった。しかし、決して高い数字とは言えない。さらに、交流の質の向上を目指していく必要がある。	・妥当・適切(8)。 ・わかば学級の交流は、行事ばかりでなく普段の学校生活の中でも行われている。質問の仕方によっても児童の回答は違ってくる。 ・児童へのアンケートの聞き方で、成果が変わってくる。 ・成果基準となる児童へのアンケート、聴き取り方の内容が適切だったか？ ・実施はされているが、児童の満足度が上がらない理由は何かを考えるべき。
学園・学校運営	①児童・生徒の育成に関する課題（学力・体力・生活指導）についての小・中連携	①小・中一貫した指導で、「挨拶・言葉遣い・時間・整理整頓・忘れ物」の生活指導の5本柱の定着を図る。	①合同研修会や学園運営会議、学園CN会議等を通して、小・中で共通理解を図りながら、課題を明らかにし、学期ごとに課題解決の検証を行う。	1	2	1	2	[成果]「あ・じ・み・わ・ただ」を合言葉に、全教職員が共通理解をもって、生活指導5本柱を児童に意識させる取組を家庭と連携して継続している。 [課題]教員の取組評価が30.9%とかなり低く、成果が上がっていないと言える。保護者の評価も61.1%と高くない。形はもちろんのこと、児童の心を育む取組の充実が急務である。	・妥当・適切(10)。　・課題あり。 ・先生方の自己評価が厳しい傾向もあるかも知れないが、何が課題か見える形となっている。 ・教員の評価が低いから児童に浸透しないのか、児童に定着が見られないから教員の肯定的回答が少ないのか。 ・今年度多くの先生に異動があり、「大沢台小」になじむ時間が必要だったのだと思う。これからです。 ・教員の取組評価が低い理由を調査・検討することも課題では？ ・「あ・じ・み・わ・ただ」について、児童(家庭)にまだ浸透していないように感じるので、今後も引き続き家庭と連携して継続してほしい。 ・「あ・じ・み・わ・ただ」はなじみ深くなってきたが、それが何を表すか保護者の間には広まっていないように思われる。
	②防災教育の充実	②従来の計画を見直し、中学校と連携した防災教育の計画を策定する。	②中学校と連携した引き渡し訓練の計画を策定し、実践・検証する。	4	4	4	4	[成果]3校の生活指導主任を中心に、「学校避難所運営マニュアル」に連動した引き渡し訓練を、9月1日にほぼ計画通りに実施することができた。保護者の満足度も85.2%(学園アンケート「防災教育」90.2%)である。 [課題]今後は、荒天の場合等あらゆる想定で実施し、「想定外」を少しでも減らしていくようにする。また、実施時期など、より効果が高い計画を立てていく。	・妥当・適切・良い(7)。 ・立地的に中学校と小学校が近かったことが、合同引き取りでも高い評価だった。「想定外」については、普段の中でどこまで想像できるかがカギ。 ・成果基準となる保護者聴き取りの対象が、運営委員に限られたのが妥当かどうか？　運営委員は十分に趣旨説明されており、理解が高いと思うが、どれだけ一般の保護者に主旨が伝わったかが分からない。 ・実施後の保護者の満足度は高くないと認識している。中学生が小学校に一緒に行かなかったなどの声が聞こえた。また、子どもが勝手に帰ってしまったなどの話を聞いた。
小・中一貫教育校としての教育活動	①小・中相互乗り入れ授業の充実	①定期的な乗り入れ授業の定着を図り、その指導方法の確立を図る。	①主に数学を中心に、中学校への週6時間の乗り入れ授業の実施率を高め、T2の役割を明確にする。	1	3	3	3	[成果]「中学校教員の乗り入れ授業はよく分かる」と答えた児童は71.7%で、前回より若干下がったが、児童の期待度は決して低くはない。児童とのかかわりを継続して増やすようにして、満足度を高めたい。 [課題]2学期から、本校からの乗り入れ授業が実施できるようになったが、実施率75%で決して高くはない。時間割をさらに工夫して、実施率を上げていきたい。	・妥当・適切・良い(9)。 ・先生方、学校の取組全体がじわじわ出てきていると考える。 ・ぜひ今後も実施していっていただきたい。 ・乗り入れは、先生の負担がとても大きいように思えるが、実施率を上げることは可能か。 ・時間割を工夫しても1学期のような状況になった時には、全く計画が成り立たなくなる。三鷹市全体の教員人財の課題ではないか。
	②学園研究における学力向上の検証	②学園研究を通して、算数・数学を中心に、問題解決型の指導法を確立し、実践する。	②主に算数を中心に、問題解決型指導を取り入れた授業を全員が公開し、相互に評価し合いながら授業力を高めていく。	3	2	4	2	[成果]学園研究を通して、問題解決型の授業の実施率は94.1%で、87.0%の児童が、「算数の習熟度別少人数の授業はよく分かる」と答えている。 [課題]国と都の学力調査は、両方とも都の平均を下回った。特に、B問題の「読み取る力」に課題が見られる。算数だけでなく国語力の向上も図っていく必要がある。	・妥当・適切(9)。　・課題あり。 ・先生方の取組評価が、児童の学力に結果となって表れるといい。 ・授業が改善が、すぐに学力調査結果に反映されるとは思わないが、経年で見ていく必要がある。 ・問題解決型の授業は行われているが、全ての子どもが解決に至る前に他の子の解決で済まされて、考えが中断されているような気がする。宿題を出し、自分で考えたものを個々にチェックするなどはどうか。 ・成果が学力調査の数値に表れないだけか、検討が必要。また、算数の問題もベースは読解力にあるため、国語の力を上げることに力を入れるのも大切。

取組項目	今年度の重点目標		成果	課題と改善方策	取組項目	学校の経営目標（中期目標）	今年度の重点目標（単年度目標）	今年度の重点目標を達成するための具体の方策	第1回評価 取組指標	第1回評価 成果指標	第2回評価 取組指標	第2回評価 成果指標	自己評価（第2回）	学校関係者評価（第2回）
児童・生徒の学力・健全育成	学力	①学習内容の定着 ②体力の向上	①学園研究を通して、問題解決型学習が、算数・数学の授業を中心に各教科で定着しつつある。 ①学園アンケートでは、家庭学習の定着状況についての肯定的評価は、昨年度約61%だったが、今年度は約66%に増えた。微増だが、家庭学習が定着してきていると感じている保護者が増えている。 ②マラソン週間やマラソン大会を継続して実施しているため、3校とも持久力について全国の平均を上回る学年が多い。また、体育朝会の充実や縄跳び週間の設定など体力向上を図る取組、日常的な取組が充実してきている。	①問題解決型学習について、今後も実践を重ね、指導方法等を工夫していく。アクティブ・ラーニングの授業について研修を重ねていく。 ①年間を通した家庭学習の習慣づけはできてきたが、なお協力が得られない家庭、児童に対して家庭学習の必要性をどのように伝え、実践させていくかが課題である。また、学年と自主学習の割合の目安表を各家庭に配布したが、それがどの程度実践できたか検証していく必要がある。 ②体力調査の結果、投げる力に課題があるのは3校共通している。各校が行っている一校一取組について情報交換しながら、3校共通で取り組める内容を模索していく。	児童・生徒の学力・健全育成	①学習内容の定着	①確かな学びを育むため、自ら学ぶ意欲の向上を図るとともに、家庭学習の内容を充実させる。	①「学びのスタンダード」「家庭学習の手引」等をもとに、指導の質を高め、児童の学習意欲の向上を図る。	2	4	4	3	[成果]94.4%の教員が児童の学習意欲の向上を実感している。「東京ベーシックドリル」等も活用して、基礎・基本の充実を図ることができている。 [課題]児童の79.1%が「進んで学習に取り組んでいる」、81.3%が「自ら進んで家庭学習に取り組んでいる」と答えているが、前回を若干下回っている。学習内容の充実を図るなど指導の質を上げていく必要がある。	・妥当・適切(10)。 ・家庭学習の取組について、学級でばらつきがあるようなので、学校全体で考えた方がよいのでは。 ・今年度は「意欲の向上」を具体的方策としているが、意欲向上のための方策が必要では。 ・宿題に関して、学校でやり切れないから出すという保護者の意見も聞く。家庭学習は、親子との交流も図っているなどの必要性も伝えていくべきである。
						②体力の向上	②体力調査の結果をもとに、指導の重点化を図る。	②全体の体力向上とともに、主に投てき力と跳躍力等の向上のため、体育授業の充実と、運動の日常化を図る。	4	3	4	3	[成果]体力調査の結果、3分の2の学年が都の平均を上回っている。特に、持久力はほとんどの学年が上回っている。さらに、6年女子は、全ての種目において、国の平均も大きく上回っている。 [課題]体力調査の結果から「握力」と「投てき力」に加え「敏捷性」にも課題が見られた。体育授業の改善とともに日常的な取組を充実させていきたい。	・妥当・適切(8)。 ・体を動かすには、大沢の地域は恵まれている。
	健全育成	①地域ボランティア活動の充実 ②児童・生徒会の連携と心の教育	①中学校では、地域行事にボランティアとして、多くの生徒が参加した。特に秋の地域行事では、教員・生徒、全校体制で実施でき、高い評価を得た。小学校でも、地域活動ボランティアへの参加率は、担任による呼びかけもあり、両校とも増えてきている。 ②児童・生徒代表者会議を年間3回実施した。例年通りのあいさつ運動や募金活動の話し合いに加え、いじめ防止の取組ついての話し合いも行った。その結果、いじめ撲滅スローガンを決定した。	①小学校では、地域行事に参加する児童が、昨年度よりも増えてはいるがまだ少ない。さらに増やすとともに、地域行事に参加する意義を理解させ、地域行事、活動の担い手とさせていく。また、保護者に対しても、地域行事、活動に参加する意義を啓発していく。 ②いじめ撲滅スローガン「みんなの気持ちを大切にして、笑顔を増やそう」をさらに浸透させていく。		地域ボランティア活動の充実	①地域行事及びそのボランティアに、児童を参加させるようにする。	②主に高学年を中心に、地域行事ボランティアへの関心を高め、児童の参加を促し、昨年度より参加率を増やす。	3	3	3	4	[成果]ボランティアの意義を繰り返し指導した結果、79.4%と、8割近い児童が「地域の活動や行事にボランティアとして参加したことがある」と答えている。地域の方の声かけもあり、着実に児童の意識は高まっている。 [課題]児童のボランティア活動を紹介できる場を設定して、児童のさらなる意識の向上、そして維持・継続を図っていきたい。	・妥当・適切(10)。　・課題あり。 ・昨年度、評価が低かった項目の評価が上っていて、改善が見られる。 ・保護者にもボランティア活動参加への協力をお願いしたい。児童には、「親から言われたから、いやいや来たが、実際活動をし終えたら、気持ちが良かった」のような体験を味わってほしい。 ・コミュニティ祭などのイベントだけでなく、環境協力会などの日常的な活動にも参加する機会を考えてみてはどうか。
						児童・生徒会の連携と心の教育	②いじめのない学園づくりのため、児童・生徒会交流活動を充実させる。	②「学校いじめ防止基本方針」に基づく取組をを徹底するとともに、児童会や拡大代表委員会を中心とした取組を通して、意識を高めていく。	4	2	4	3	[成果]「学校いじめ防止基本方針」に基づき、全教職員で組織的に取り組むことができている。87.6%の児童と85.1%の保護者がその取組に満足していると答えている。 [課題]4月から11月末現在のいじめ認知件数は6件あったが、うち4件は解消した。残り2件は指導を行い、現在経過観察中である。引き続き「いじめゼロ」を目指して学校全体で情報を共有して取り組んでいく。	・妥当・適切(9)。 ・課題にあるように、児童1人の案件に対しても、多くの先生が情報を共有して、関わり、対応していくことで、児童も保護者も納得するのでは。「ゼロ」は難しいが、認知して対応していくことが大切。 ・いじめ防止の取組に関し、約13%の児童が望む取組とは何なのだろう。子どもたちのつながりは、意外と複雑なのかもしれない。 ・いじめ調査実施後の面談などにより、すっきりした気分になれているであろうか? ・1割強の児童と保護者が、取組に満足していないという視点からの課題も検討すべきでは？
コミュニティ・スクールの運営		①サポート隊の人財確保 ②CSの活動のアピール	①サポート隊の活動が日常化し、定期的な協力が得られるようになった。また、教員も積極的に依頼する体制が構築された。 ①ICU学生が定期的に学習のサポートに入ったり、「けやきっず」の活動のサポートに加わったりするなど、放課後の活動がおおさわ学園の特色となっている。 ①人財確保のための講座も開催し、サポート隊の意義等を広く周知できた。 ②学校だよりをはじめ、折に触れてCSの活動を紹介できた。CSだよりを読んでいるという回答が増えた。 ②CS委員会のHPの更新、学園通信でのCSの取組コーナーの新設を行い、配布数も増やし、CSの諸活動の「見える化」を推進した。	①サポート隊参加の保護者への負担が一部の方に集中し過ぎないよう、募集の仕方などを工夫し、新たな人財確保に努めていく。 ①学習ボランティアを活用した授業改善に努め、学力向上につながるサポート体制を作っていく。 ②CS活動に対する保護者の理解度は決して高くない。今後も、いろいろな方法でPRを続け、「CSの見える化」を図っていく。 ③CSのHPの更新は定期的に実施できたが、今後は、閲覧していくための広報活動が必要である。	コミュニティ・スクールの運営	①サポート隊の人財確保	①保護者による学習ボランティアの拡大を図る。	①学習ボランティア活動の広報の充実を図るとともに、学年だより、保護者会等でも随時呼びかけを行う。	2	4	4	3	[成果]サポート隊の活動が日常化し、教員も積極的に依頼する体制ができている。2学期は、新たに「書写」の授業のサポートにも入っていただいた。算数サポートは、11月末現在、昨年度同時期より、3%の増加である。 [課題]継続してボランティアに参加していただいているが、リピーターが多いので、新たな人財を今後は増やしていきたい。	・妥当・適切(10)。 ・募集の時に、なぜ必要かを具体的におっしゃっていただけると参加しやすい。 ・課題のボランティアの増加は単に人数を増やすというよりは、先生が必要とする人数が揃うことを目指せばよいのでは。特に授業サポートのリピーターが多い事ははががたい事だと思う。 ・授業サポートに入る方の意識が暴走しなければいいなと感じる。「算数がわかった！」と感じさせるためには、授業に向かう姿勢からと考える。教科書、ノート、筆記用具のみならず、上履きをはいているか、黒板を見ているか、椅子に深く腰掛けているかなど態度も大切と考える。
						②CSの活動のアピール	②CSの活動に対する保護者の理解を深めるための広報活動を充実させる。	②「CSだより」だけでなく、学園・学校だよりや学園・学校HP、校内掲示板等も活用してPRを充実させる。	2		4	2	[成果]学校だよりをはじめ、折に触れて、CSの活動の紹介をしている。CSだよりや学園だよりも82.8%の保護者が「いつも読んでいる」と答えており、昨年度より増加している。 [課題]CSの活動に対する保護者の理解度は、66.7%と決して高くない。今後もPRを継続して、理解度を高めていく必要がある。	・妥当・適切(6)。 ・とても工夫を感じた。今後はCS活動の「何を」PRし、どう伝えるのか（手段）を学園として検討していきたい。 ・CSガイドパンフレットでどこまで理解度が上がるか期待したい。 ・「広報おおさわ」などの地域全体に配布する地域情報紙に積極的に活動を紹介してはどうか。 ・CSの活動を理解するのはなかなか難しいが、サポート隊の活動等で少しずつ知っていただけたらと思う。 ・CSの活動に関しての保護者の理解度を高めるためにPRの方法を見直す事がCS委員会の課題!?と考える。 ・CSについて分かるのは、歴代のPTA会長だけではないかと思う時がある。部会にもっと一般の保護者が入るといいのではないかと思う。 ・PRには、CSガイドを使って、地域行事や読み聞かせなど身近な活動へのちょっとした参加もCS活動であることをPRしてほしい。CS委員会のPRはほどほどで。